

図1

農家概要

- 鶏種：ボリスブラウン
- 飼養羽数：11,500羽
- 飼養形態：開放鶏舎
ケージ直立6段・1棟
- その他：オールイン・
オールアウトなし
- 鶏舎内の作業：一人



図2

2010年の発生状況

発生月	11月
斃死羽数	80羽
産卵率	80%から67%に低下
発生原因	殺ダニ剤散布方法の失宜 (鶏舎壁や床に散布)
指導内容	殺ダニ剤散布方法の変更 (鶏体に散布)

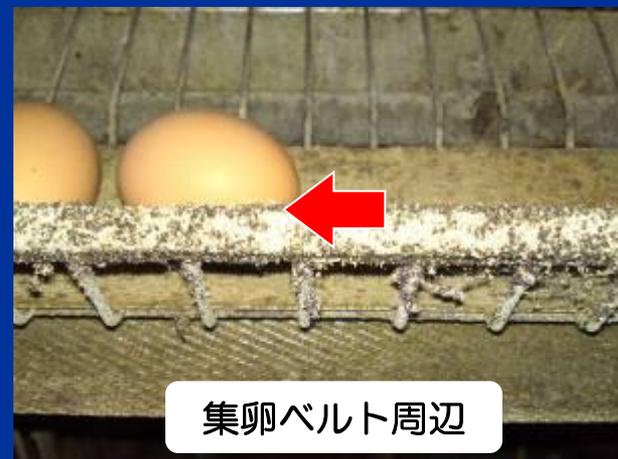
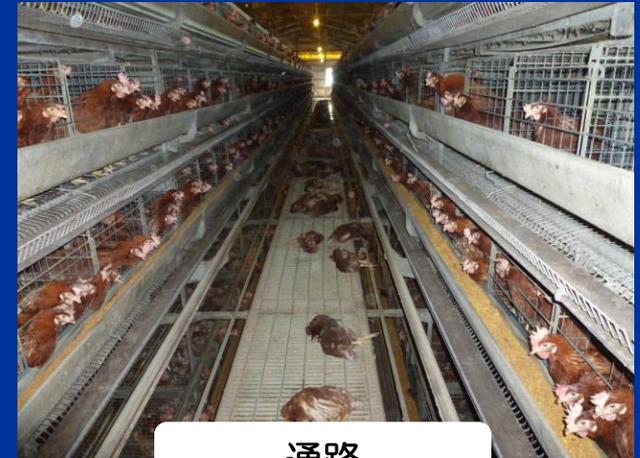


図3

2012年の発生状況

発生月	11月
斃死羽数	400羽
産卵率	85%から70%に低下
発生原因	殺ダニ剤散布時期の遅れ
指導内容	殺ダニ剤散布の徹底



通路



鶏体（斃死鶏）

図5

調査結果

(1) 飼養管理状況

- 産卵率、死亡羽数ともに問題なかった
- 鶏体にダニの寄生はなかった
- ケージ周囲等にもダニは見られなかった



図6

調査結果

(2) 殺ダニ剤散布状況

- 方法：鶏体に直接散布
- 頻度：ダニの発生時期に2週間に1回から1週間に1回
- 使用薬剤：有機リン系薬剤
- 濃度：1mg/ml

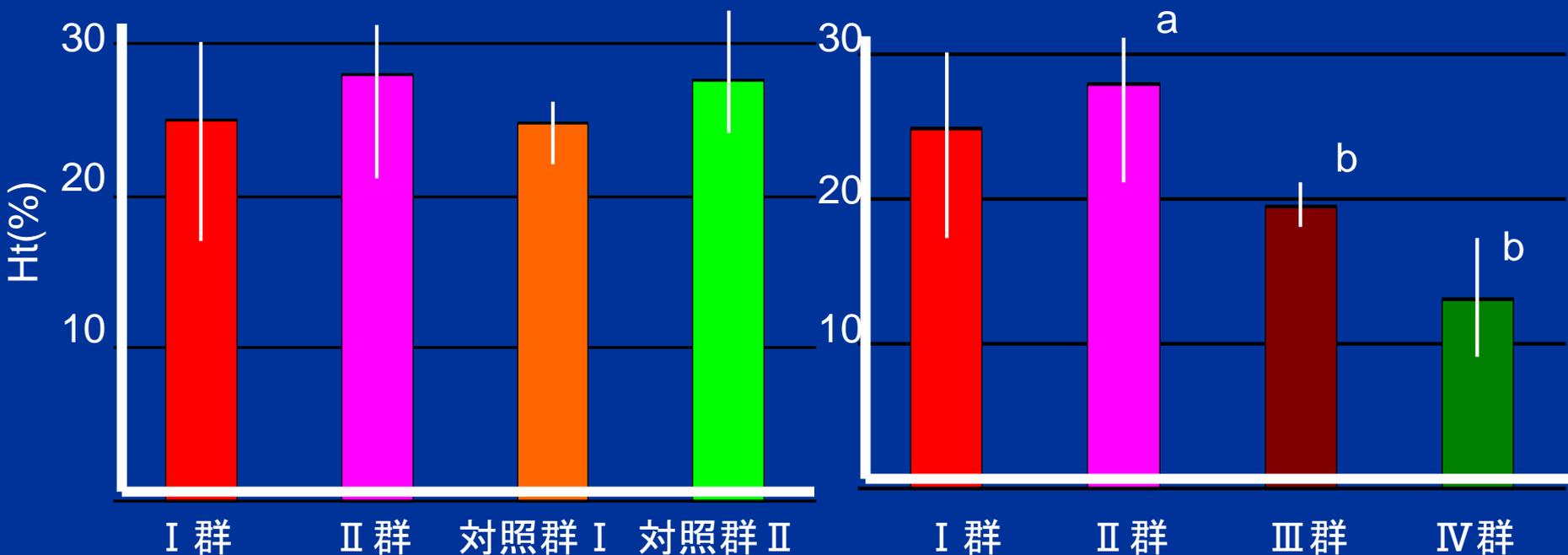
今年度当初に使用薬剤を
カーバメイト系薬剤から有機リン系薬剤に
変更するよう指導

図7

血液検査結果 (Ht)

I 群 当農場(9月)
II 群 当農場(11月)
対照群 I 他農場(9月)
対照群 II 他農場(11月)

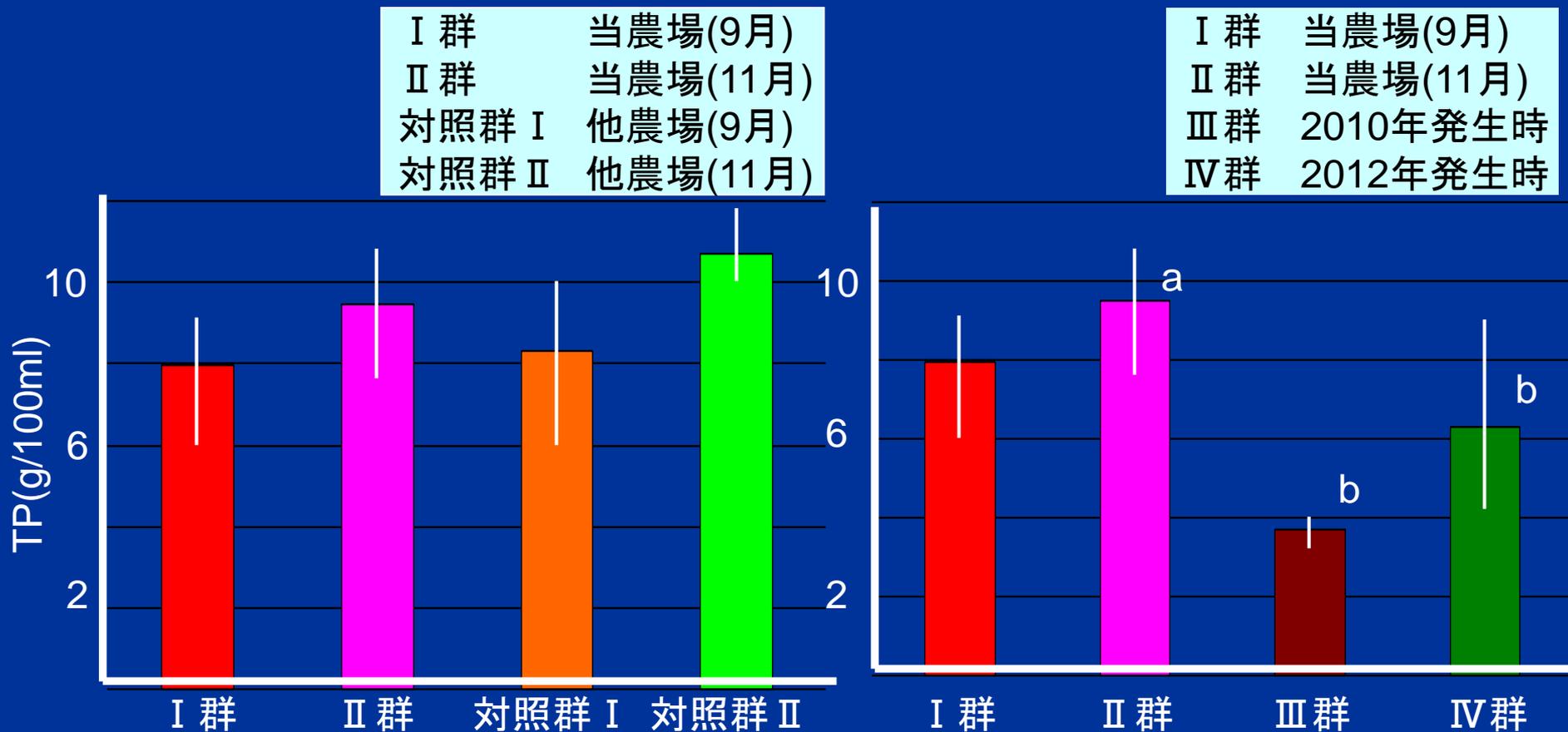
I 群 当農場(9月)
II 群 当農場(11月)
III 群 2010年発生時
IV 群 2012年発生時



異符号間に有意差あり
($p < 0.05$)

図8

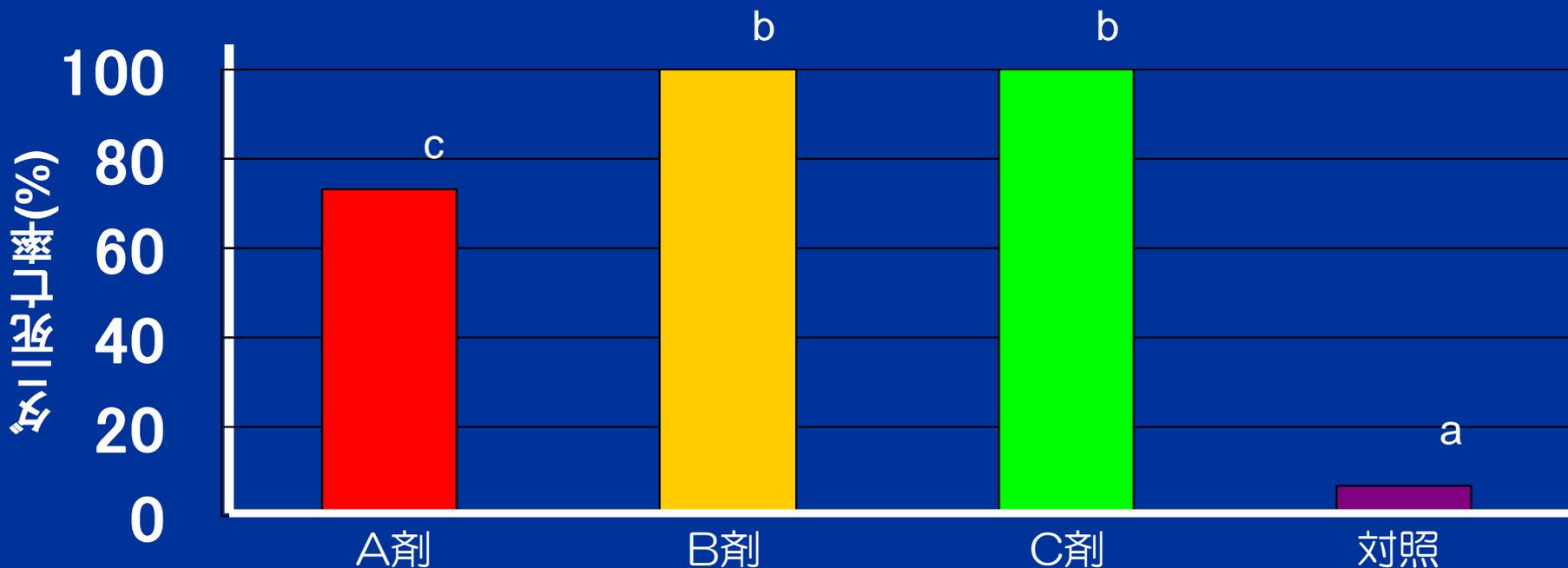
血液検査結果 (TP)



異符号間に有意差あり
($p < 0.05$)

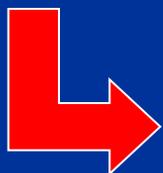
図9

薬剤感受性試験結果



A剤、B剤、C剤ともに対照に対し有意に高いが
A剤は、B剤及びC剤に対し有意に低い

異符号間に有意差あり
($p < 0.05$)



当農場ではA剤の
効果が低下

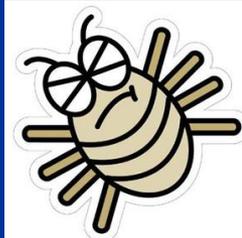


図10

殺ダニ剤散布プログラムの検討

トリサシダニの最適発育温度
外気温 23~26℃



この時期に重点的に散布



さらに

農場付近の最高気温の推移

月	最高気温
1	9.9
2	11.2
3	14.4
4	19.8
5	24.0
6	26.7
7	30.2
8	31.7
9	29.0
10	23.3
11	17.8
12	12.5

気象庁データより

ダニの生態を考慮し、週1回鶏体散布

図11

殺ダニ剤散布プログラム

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
散布	↑	↑	↑	↑↑	↑↑↑↑	↑↑	↑	↑	↑↑	↑↑↑↑	↑↑	↑

時期と回数

5月と10月

4月、6月、9月、11月

その他の月

週1回

2週に1回

月1回



年間
22回

方法

鶏体散布

使用薬剤及び希釈倍率

有機リン系薬剤 1000倍程度(1mg/ml)

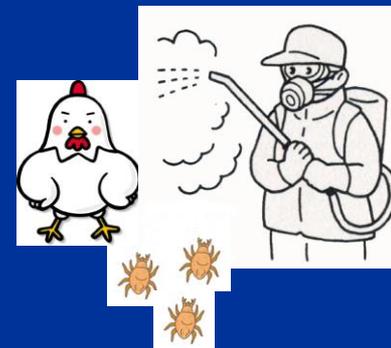


図12

対策経費とその経済的効果

新たな対策に要する経費 162千円

殺ダニ剤散布	$4,500\text{円/個} \times 3\text{個/回} \times 10\text{回}$	$= 135,000\text{円}$
ビタミン剤投与	$4,500\text{円/個} \times 0.2\text{個} \times 30\text{回}$	$= 27,000\text{円}$
	計	162,000円

2012年の損出額
2,300千円
(畜主見積)



殺ダニ剤散布を適切な時期
に適切な方法で実施すること
により、大きな損出をし
なくてすむ！

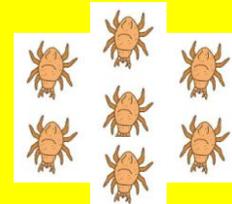
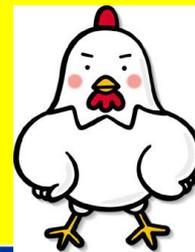


表1

血液検査結果

	I 群	II 群	対照群 I	対照群 II	III 群	IV 群
Ht	24.9±4.7	27.8±3.0	24.7±1.4	27.5 ±2.6	19.4±1.1	13.0±5.7
TP	8.0±0.9	9.5±1.1	8.3±1.3	10.7±0.9	3.7±0.4	6.3±1.4